

## ピアニストの健康エッセイ・14

### 記憶力

「どうして何も見ずに、長い曲を弾けるのですか？」と、ピアノの演奏会の後に聞かれることがあります。その都度私はこう答えています。「苦労しているのですよ」

ピアノをソロで弾く時には暗譜で、というのはいつ誰が決めたのでしょうか。リストの時代からだそうですが、時に恨みたくなるほど暗譜は嫌なものです。

若いうち(25歳くらいまで)はさほど苦労しませんが、歳をとるほど新しい曲を暗譜で弾くことに「怖さ」を感じます。

いくつになっても暗譜にまったく苦労しない、というピアニストも存在しますが少数です。

普通は年齢とともに様々な経験を重ねます。もちろんいいことばかりではありません。ステージ上で一瞬頭が真っ白になった…という恐怖体験も含まれます。

それでも身体がしっかりと記憶していれば、なんとか指が勝手に動いてくれるのですが、ヒヤリとした思いは消えることはなく、ますます暗譜が怖くなるのです。

では、どのように克服するのかというと、やはり安心できるまで練習をするしかありません。方法はそれぞれ違いますが、視覚と頭脳と運動をバランスよく稼働させ、ひたすら弾くしかないのです。

ところで、暗譜で演奏しなくていいこともあります。

それは室内楽の時。他の楽器とのアンサンブルにおいては譜面を置いて演奏することが主流です。

ただし譜面があるので楽だと思ったら大間違い。

共演者の動きやタイミングを見ながら音楽を作るためには、譜面を常に目で追っていても完成度が高くはなりません。なので、譜面は置いているものの、実は暗譜していることがほとんどです。

さて、名ピアニスト・リヒテル(1915—1997)は晩年、ソロの際も譜面台に楽譜を置いて演奏するスタイルを通しました。

もともと恐ろしいほどの記憶力の持ち主であったと言われるリヒテル。譜面を置いていたのは「その方が(作品に対して)誠実だから」が一番の理由であり、記憶力の低下ではなかったそうです。

譜面を置く・置かない、いずれにせよ曲そのものをしっかりと頭に叩き込んでいなければ、流麗に演奏することは困難ということに違いはありません。

ちなみにリヒテルをはじめ、ピアニストはかなり高齢になっても頭脳の衰えを感じさせない人が多いようです。

やはり、常に記憶力とその維持に努め、さらに日常的に緊張感にさらされることが、老化を防ぐコツなのかもしれません。

丸山美由紀(ピアニスト、糸魚川市在住)